

第 13 回(2013.04.01 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

赤旗と白旗

一般的に白といえば黒、赤なら青が対称色ですが、運動会などでは赤、白のハチマキや帽子を被ります。また、式典や祭などの慶事には紅白の幕が使われます。逆に葬式など弔事の場合は黒白の幕を張りますが、これは、古代陰陽道では赤は太陽を表し、黒は闇すなわち夜を表します。したがって、慶事には赤、弔事には黒を基調とした色が使われてきました。だから運動会のような一種の式典には紅白の幕を使い、紅組白組に分かれて競うのだという説がありますが、一説では、慶事の紅白、弔事の黒白の由来とは違って、「源氏の白旗」、「平氏の赤旗」から来ているという説もあります。

「赤旗」は平家が用いていた旗印です。他方「白旗」は源氏が用いていた旗印です。なぜ源氏が白旗で平氏は赤旗なのかは諸説があります。一説によれば清和源氏(清和天皇系の源氏)の祖先は朝鮮半島の新羅系、桓武平氏(桓武天皇系の平氏)は百済系だからで、新羅は白旗を、百済は赤旗を用いていたからだと言います。ちなみに、蒙古のチンギス・ハーンの旗は白だったことから、源氏の義経がチンギス・ハーンになったという説の根拠の一つでもあると力説する人もいます。

源氏の守り神の八幡神は第 15 代天皇の応神(おうじん)天皇です。品陀和気命(誉田別尊、ほんだわけのみこと)として祀られていますが、応神天皇は母である神功(じんぐう)皇后が新羅、百済、高句麗を征伐(※1 三韓征伐)した帰途生まれたと言われていますが、実は応神天皇以前の歴史に不明なところが多く、そこから天皇の祖先は朝鮮半島からの帰化人だという説、あるいは清和天皇や桓武天皇の母親が朝鮮半島からの帰化人だという説など、様々の説があります。

清和源氏の祖先が新羅系、桓武平氏は百済系だというのは、そういった説によるものです。もちろん、確たる証拠はありませんから反論も多く、こういった説は、神国日本の純潔性から太平洋戦争以前は絶対に口にできなかったのですが、終戦後は「言論の自由」という「錦の御旗」を振りかざして、続々と大陸や朝鮮半島との混血あるいは帰化人説がでてきました。センセーショナルな説を発表して、歴史学者の単なる売名行為ではないかと皮肉る人がいるのも事実です。

余談ですが、最近ではハチマキをする学校も少ないようですし、帽子の色も赤と白だけではなくカラフルになってきたところも多く、中には色分けもしないという学校もあります。みんな仲良く平等に、という学校教育の精神からだと言います。徒競技でも、一着二着と順位は付けないところもあって、ゴールの前で早い子は遅い子を待ってから一斉にテープを切るところもあるようです。

子供の心を傷付けないようにという方針らしいのですが、モンスターママなどの攻撃で、先生がたがご配慮されたのだとも言われています。大人になってもガラスの身体と心で世の中を渡っていくのは、さぞかし大変だろうと思うのですが、そのころには当事者たちはこの世にいないから責任の取りようがありません。どうすればいいのでしょうか。

(※1)神功皇后の三韓征伐

『日本書紀』によれば、神功皇后(170～269)は、仲哀(ちゅうあい)天皇(第 14 代)の皇后で、

天皇が熊襲(くまそ)の反乱を平定して帰る途中急死したため、神功皇后は熊襲の背後にいると思われた新羅を攻め、百済、高句麗を日本の支配下に入れたという記述があり、これを「三韓征伐」と言って、戦前までの歴史教育の中で教科書にも記載されていました。

しかし、三世紀の日本は弥生時代であり、神功皇后の存在が実証できないこと、また『魏志倭人伝』によれば倭国大乱の時代であり、朝鮮半島への出兵する余裕はないと考えられるところから、戦後の歴史研究では史実ではないとする学者が多いのです。

頭領と棟梁

盗賊などの親分は「頭領(とうりょう)」ですが、歴史書などでは武家の一門の長を「棟梁(とうりょう)」と書きます。武家の親分も頭「かしら」であることには間違いないから、「頭領」でいいのではないかと、多くの人は言います。武士も盗賊も弱い庶民から略奪行為を働くので似たようなものだから、どちらでもいいようなものだと思うのですが、あえて言うならば盗賊は仲間の頭だから頭領、武家の方は一家(棟)の長だから棟梁なのでしょう。大工の親方は家(棟)の建築をしきるから棟梁です。

大泥棒といえば石川五右衛門と鼠小僧次郎吉が有名です。石川五右衛門は、文禄3年(1594)に釜ゆでの刑に処せられました。また、鼠小僧次郎吉は、天保3年(1832)に磔獄門(はりつけごくもん)になりました。どちらも大名家ばかり狙って貧乏人に恵んだ義賊だと称されていますが、実際は女と博打に明け暮れていたようです。しかし、この二人は単独犯です。

大泥棒の頭で有名なのは日本左衛門でしょう。浜島庄兵衛という元尾張藩の下級武士で、江戸時代に跋扈した盗賊です。数十人の手下とともに「犯す、殺す、貧しいものから盗む」というとんでもない盗賊でしたが、最後は火付け盗賊改方に捕まって処刑されました。この日本左衛門をモデルにしたのが、河竹黙阿弥の『青砥稿花彩紅画(あおとぞうしはなのにしきえ)』通称『白浪五人男』です。

他方、武士の棟梁といえば、八幡太郎源義家(はちまんたろうみなものよしえ:1039~1106)でしょう。清和天皇の子孫の経基王は源姓を名乗りますが、この源経基の曾孫に当たる源頼義の嫡男で幼名不動丸は、7歳の時に京都石清水八幡宮で元服をして、自ら八幡太郎義家と名乗り、後に「前九年の役」や「後三年の役」で活躍し、「源家の棟梁」とか「武家の棟梁」と称えられました。

義家は「後三年の役」で清原一族の反乱を鎮圧しましたが、朝廷は清原一族が朝廷に反抗したのではないとして、この戦いを内戦・源義家の私戦であるとし、戦功行賞は行いませんでした。そこで仕方なく、義家は自らの財を味方した家人・郎党に分け与えたので、武士たちの間で義家の評判が高まり、武家の棟梁としての地位を確固たるものにしましたが、逆に朝廷の権力は弱っていきました。上司は部下の手柄を評価し、ご褒美をケチってはいけない、という教訓です。

平氏最後の棟梁は平清盛でしたが、鎌倉時代以降は橘氏や平氏が没落しましたから、北条家などは平氏の出ですが棟梁というわけではありませんでした。徳川時代には先祖が源氏か藤原氏がブランドとなって、武士や大商人たちはこぞって系図を偽造したり、売買したりしました。徳川家康も最初は「藤原」を名乗っていたようですが、後には「源」を名乗るようになったという説もあります。したがって、最後の武士の棟梁は徳川家となっています。

現在でも家系を自慢する人が結構いますが、実際は本当かどうかわかりません。以前に「姓と氏」でも触れましたが、たとえ本当であったとしても、今では血も薄まって先祖の欠片も残っていません。それよりも、偉い先祖を自慢する者は、逆に自分が不肖の子孫だといっているのと同じだ、ということに気が付いていません。まったく大笑いしたくなる話ですが、日本人は遡れば必ず天皇家の誰かに繋がるという学者もいますから、一概に笑い飛ばすこともないのかもしれない

れません。

家柄を自慢する人に出会ったら、「よう！大将！」ではなく、「よう！陛下！」と呼んであげましょう。キャバレーなどでは、ホステスが貧乏人にも「社長さん！」と呼んでくれるではありませんか。

(篠井純四郎)